

Newsletter

No.17



1 2015 年上半期の地域研ニュース

シンポジウム「ポストネオリベラル期のラテンアメリカ政治—現状と課題—」
東南アジアの移民・難民問題を考える—越境的課題に対応するための学会連携

2 データベースを構築・公開

4 地域研とスーパーグローバル、およびスーパーサイエンスハイスクールの連携 —次世代への地域研究教育—

5 地域情報学の最前線

「色で見分ける多様な言語～多色字幕版『細い目』」上映
「映画から世界を読む」

6 在外研究者からのたより「行列好きなフィリピン人」

7 共同研究ワークショップ開催報告

「せめぎあう眼差し—相関する地域を読み解く」

8 共同研究の現場から

宗教実践の時空間と地域

CIAS 所蔵資料の活用

非文字資料の共有化と研究利用

「地域の知」の情報学—時間・空間・語彙に注目した地域情報学の展開—

10 旅紀行「コトとしての建築」

11 出版物の紹介

12 自著を語る

13 客員研究員紹介

JCAS NEWS

14 新刊紹介

15 中山大將助教が着任しました

The Last Photograph

シンポジウム 「ポストネオリベラル期のラテンアメリカ政治 —現状と課題—」

過去 30 年間、ラテンアメリカ諸国は、国家社会関係のあり方について模索を続けている。1970 年代までの約半世紀は、輸入代替工業化を中心とする国家主導の経済開発に代表される「国家中心モデル」が支配的であった。同モデルは 1970 年代までに破綻し、1980 年代からは、グローバル化の進展を背景にネオリベラリズムへの転換が図られ、国家の役割を縮小させる「市場中心モデル」が基調となった。しかし、「市場中心モデル」のもとでは、マクロ経済レベルの安定と発展は可能となったものの、歴史的、構造的にラテンアメリカ諸国が抱えてきた格差や貧困を克服するまでには至らなかった。そのため、1990 年代末以降、ネオリベラリズムの見直しを求める勢力が台頭し、多くの国で政権を握る「左傾化」現象が観察されてきた。ネオリベラリズムが支配的であった時期は過ぎたという意味で、現在のラテンアメリカはポストネオリベラリズム期にある。

本シンポジウムは、ラテンアメリカにおけるネオリベラル改革後の政治展開において、政党政治が安定的な事例と不安定なケースが生じていることに着目し、その相違の背景について分析した。また、いくつかの代表的な国を取りあげ、近年の政治動向ならびに現状を分析し、今後の展望について考察を加えた。

(村上 勇介)



東南アジアの移民・難民問題を考える —越境的課題に対応するための学会連携

アンダマン海を南下したロヒンギャ難民が東南アジア各国から上陸を認められずたらいまわしにされた様子が国際的な注目を集めた。難民船を追い返したタイ、マレーシア、インドネシア各国政府の対応や、自国内に長年居住するロヒンギャに国籍を与えないミャンマー政府の対応が問題視された。

移民・難民問題は、複数の国・地域にまたがることや、密入国や不法滞在など統計に表れにくい事象を含むことから、全体像や実態を掴みにくい。本研究集会は、ロヒンギャ難民の発生の背景や東南アジア諸国の対応を検討するため、東南アジア学会、日本マレーシア学会、南アジア学会の協力を得て送り出し地域（ミャンマー、バングラデシュ）と受入れ地域（タイ、マレーシア、インドネシア）の地域研究者を迎え、さらに難民問題の実務者との連携をはかるために東京大学グローバル地域研究機構持続的平和研究センターの協力を得て実施した。

研究集会では三つの知見が得られた。(1)出身国を同定できる書類を持たずに訪れるために国ごとに人を登録して保護や管理の対象とする仕組みから抜け落ちるという非正規移民・非正規滞在者の問題。(2)近隣地域の難民発生に際し、一時的に人道的な受け入れを行う一方で、難民と認める以上は国際社会の問題であるとして世界各国に応分の負担を求める東南アジア諸国の対応。(3)東南アジアへのロヒンギャ難民の流れが急増した背景として中東での受け

入れが困難になってきていること。個別地域の事情を理解するには世界の他地域の動向との連動を意識する視点が重要であり、また、難民問題は人道上的対応が急務である一方で、それが目立つようになる前から事態は生じており、なぜそのタイミングで目立つようになったのかという歴史的経緯を考えることも重要である。

この研究集会の記録は地域研究コンソーシアムより JCAS Collaboration Series No.12 として刊行され、PDF 版がウェブ公開されている。そちらもあわせて参照されたい。

(西 芳実)



データベースを構築・公開

構成：亀田 亮宙

ここでは、地域研で新たに構築・公開したデータベースや、データや機能を追加したデータベースについて紹介する。

▶ 東南アジア地域研究史資料集成データベースを公開

<http://www.cias.kyoto-u.ac.jp/database/category/seas-db.html>

本東南アジア地域研究史資料集成データベースは、(1)東南アジア地域研究における図書・雑誌などの文献・資料約 1,300 点、(2)フィールド記録写真画像約 8,000 点、(3)19 世紀バンコク水路・灌漑・家屋配置資料等約 8,000 点、(4)ハノイ遺蹟拓本資料約 2,500 点で構成される主に一次資料のデータベースである。本データベースは、平成 26 年度日本学術振興会科学研究費・研究成果公開促進費（データベース）の助成を得て構築したものである。(1)東南アジア地域研究における図書・雑誌などの文献・資料は、石井米雄コレクションの一部であり、タイ国三印法典、タイ国歴史地図、貝葉資料、多岐にわたる一次資料を含む。言語関係では、シャン・タム文字文化圏などタイ諸語、モン文化圏に関する周縁諸国の言語関係資料、文献ではオランダ、フランス、スリランカ・インド関係文献など貴重資料が含まれる。(2)フィールド記録写真画像は、石井米雄らがフィールド調査において撮影した写真画像の集成である。(3)19 世紀バンコク水路・灌漑・家屋配置資料は、19 世紀末ラタナコーシン（バンコク）朝中心部の地籍・郵便台帳の資料で、特に運河水路の当時の状況や各家屋の管理状況が把握できる。(4)ハノイ遺蹟拓本資料は、ベトナムの首都ハノイの中心部における Den, Dinh など設置されている遺蹟拓本のすべてを網羅する資料集成である。



東南アジア地域研究史資料集成データベース

(柴山 守)

▶ 『カラム』雑誌記事データベースにデータを追加

<http://majalahqalam.kyoto.jp/>

地域情報学プロジェクトのマレー語雑誌データベースプロジェクトでは、1950～60 年代のマレー世界におけるムスリム社会の動向を理解するうえで重要な史料である雑誌『カラム』をデータベース化した『カラム』雑誌記事データベースを構築、公開しています。

今年度採択された個別共同研究ユニット「1950・60 年代の東南アジア・ムスリムの社会史」（代表：坪井祐司）で 71～100 号の 30 号分の記事の本文をローマ字に翻字したデータをデータベースに追加し、本文のローマ字での検索が可能になりました。

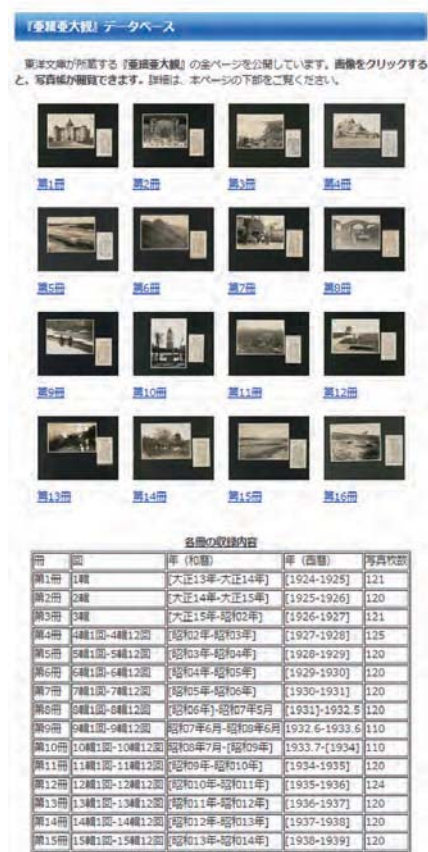
(山本 博之)

▶ NIHU 東洋文庫拠点と共同で、 『亜細亜大観』データベースを構築、公開

<http://www.tbcas.jp/ja/lib/lib4/>

公益財団法人東洋文庫が所蔵する『亜細亜大観』全16冊は、大連に拠点を置いた亜細亜写真大観社が1926年から1940年頃まで発行した月刊の写真帳である。写真帳の台紙にはプロによって撮影された精細なモノクロプリントが貼り付けられており、写真1枚ごとに短い解説文がつけられている。10枚を1セットとして、1ヶ月に1回、会員向けに配布されていた。日本人カメラマンが、中国・朝鮮半島・モンゴル・チベットなどの風俗や民情、自然風景、歴史的建造物などを撮影したものであり、当時の様子を伝える貴重な資料である。一方、中国各地でおこっていた社会・政治的事件あるいは戦争の状況など、時事的な理解を促す写真はきわめて少ない。ともあれ、発行された時期によって写真の撮影時間が特定でき、写真画像と同様に解説文によっても場所、コンテキストが理解できることが、この写真帳の優位性である。『亜細亜大観』に関するデータベースは、国立国会図書館近代デジタルライブラリーでも公開しているが、拡大画像が鮮明ではない。本データベースでは、グラフ誌や写真帳の公開のモデルを提起することを目的として、あくまで研究利用を第一義として精細画像を公開した次第である。なお、本サイトの公開にあたっては、東洋文庫、京都大学地域研究統合情報センター、NPO 法人デジタルヘリテージデザイン、株式会社カロワークスの協力を得た。また、写真解説文の入力には、多くの個人の方にご協力いただいた。

(貴志 俊彦)



『亜細亜大観』データベースのトップ画面

▶ 地域研究資源共有化データベースを多言語対応しました

<http://app.cias.kyoto-u.ac.jp/GlobalFinder-Ig/cgi/Start.exe>

地域研究資源共有化データベースは、インターネット上に分散している地域研究関連データベースの統合検索を目指した新しいタイプの情報システムです。通常の語彙検索に加えて、地図を利用した空間検索とタイムラインを利用した時間検索が可能です。本システムにより、地域研の17データベース（地図データベースを含む）、東南アジア研究所の5データベース（地図データベースを含む）、総合地球環境学研究所の5データベース、国立民族学博物館の19データベース、およびOPAC（地域研、東南アジア研究所、北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター、東京外国語大学、カリフォルニア大学バークレイ校東アジア図書館）5データベースの合計51データベースの統合検索が可能となっています。地域研究資源共有化データベースに共有化されているデータは、英語・タイ語・ロシア語などさまざまな言語で記述されているため、検索語が日本語であれば英語データベースにはヒットしないという問題がありました。「地域研究資源共有化データベース（多言語対応試行版）」は、言語グリッド (<http://langrid.org/jp/>) のサービスを利用して地域研究資源共有化データベースに翻訳機能を加えた実験システムです。

(原 正一郎)

地域研究資源共有化データベース

SUPER GLOBAL HIGH SCHOOLS SUPER SCIENCE HIGH SCHOOLS

地域研とスーパーグローバル、 およびスーパーサイエンスハイスクールの連携 ——次世代への地域研究教育——

福岡県立鞍手高等学校 (SGH 指定校) の生徒が地域研を訪問

2015 年 8 月 4 日 (火)、平成 27 年度スーパーグローバルハイスクール (SGH) 指定校である福岡県立鞍手高等学校の生徒 40 名、教員 4 名が地域研を訪問しました。SGH 研修の一環として、地域研では西准教授により JCAS オンデマンドセミナーの講義、短編映画の上映会が行われました。

「スマトラ大津波が繋いだ世界——地域から世界を見る目を鍛える」をテーマに、西准教授による講義が稲盛財団記念館大会議室にて行われ、生徒たちは、災害でつながるアジアという視線を獲得することでこれまで気づかなかった東南アジアとのつながりに気づいたり、災害への対応からより広い世界的な視野をもつ可能性がひらけるという話に熱心に聞き入っていました。講義の後には活発な質疑応答が交わされました。

午後は、「映像から読み解く東南アジア——マレーシア・シンガポール」をテーマに、セミナー室にて上映会が開催されました。映像作品から東南アジアの人々の様子と社会の課題を探ってみようという西准教授の問いかけがなされ、ヤスミン・アフマド監督の 7 つの短編作品が上映されました。

スーパーグローバルハイスクールについて
(<http://www.sghc.jp/>)



奈良学園高等学校 (SSH 指定校) の高校生たちの研究に協力

2014 年度より、地域研の谷川助教が奈良学園高等学校の高校生計 10 名 (2014 年度 6 名、15 年度 4 名) のグループ研究を指導しています。今年は 7 月 13 日、8 月 19 日に学生たちが地域研にやってきました。同校は、スーパーサイエンスハイスクール (SSH) 指定校として理系教育に力を注いでいますが、サイエンスを幅広く捉え、地域文化や里山環境などに対する理解も、理系的思考を深める上で不可分のものとして重視しています。



大和郡山の金魚池を自転車で調査する高校生たち

昨年度来のテーマとして、谷川助教と学生たちは、同学校のある大和郡山市の文化的景観の成立メカニズムを研究しています。大和郡山は、水田と金魚池に囲まれた水に浮かぶ都市といっても過言ではなく、学生たちはそうした景観が成立した要因として、水田と金魚池の空間的な親和性や歴史的な形成過程に注目してきました。都市空間の分析や歴史地理、魚の生態や、社会経済動向など、複合的な要素について考えながら、最終的にはそれらの相関関係を文化的景観の成立システムとして、明らかにすることを目標にしています。

スーパーサイエンスハイスクールについて
(<https://ssh.jst.go.jp/>)

地域情報学の最前線



色で見分ける多様な言語～多色字幕版『細い目』 上映

地域情報学プロジェクト「映像データベース」、共同研究「映画に見る現代アジア社会の課題」、マレーシア映画文化研究会／混成アジア映画研究会による多色字幕版『細い目』がマレーシア映画ウィーク（2015年4月、六本木シネマート）で上映された。多民族社会であるマレーシアでは1人の人が複数の言葉を同程度に話せるため、会話の途中で言語が切り替わったり1つの文に複数の言語の単語が混じったりすることがしばしばあり、言語の選択や切り替えにもメッセージが含まれる。映画でも登場人物が多言語のセリフを全て理解しているとは限らず、そのことが意味を持つにもかかわらず、外国映画では字幕でも吹き替えでも全てのセリフが1つの言葉に翻訳されるため、観客にはセリフの多言語性が伝わりにくい。この問題への取り組みの1つが言語別に字幕を色分けする多色字幕である。素材とした『細い目』には英語、マレー語、北京語、広東語、福建語、アラビア語のセリフが登場するが、全て違う色にすると複雑さが増すだけで作品の理解に妨げになるため、セリフを〈観客を含む全ての人にわかる言葉〉〈マレー人にわかる言葉〉〈マレー人にわからない言葉〉の3つに色分けした。また、挿入歌は、登場人物には聞こえていない言葉と捉えて〈観客を含む全ての人にわかる言葉〉と同じ色にした。今回は3色にしたが、色の種類や数は作品ごとに（そしておそらく字幕製作者ごとに）変えるべきかもしれない。（山本 博之）



『映画から世界を読む』

（山本 博之著、京都大学学術出版会、2015年、62頁）

コンピュータを駆使した最新の情報技術では、設計者は満足させられたとしても多様な現実世界を十分に捉えることは難しい。世界には情報処理や通信のインフラが十分に整っていない地域があることに加え、社会に置かれた事物を扱う以上は機械的に計測可能な情報だけでなく人々の思惑も考慮せざるを得ないためでもある。このような考えのもと、現場の利用者にとって意味がある情報処理の方法を分野や素材ごとに集め、主に大学の新生向けに研究生活のガイドの意味を込めてまとめたものが「情報とフィールド科学」シリーズであり、本書はその第1巻である。現実世界を捉えるには必ず何らかの枠組みに切り取らなければならないが、私たちはふだんそのことに自覚的ではない。枠組みを強く意識して世界を切り取っている（ただしその一方で意図せざる形で地域性や時代性が映りこんでしまう）という特性を持つメディアである映画を題材に、世界の捉え方について考える。



行列好きなフィリピン人

2015年6月より1年間の予定で、フィリピンのアテネオ・デ・マニラ大学にフィリピン文化研究所（IPC）の客員研究員として在籍しています。「頭脳循環を加速する戦略的国際研究ネットワーク推進プログラム」による派遣です。地域や階層によって使う言葉も見るメディアも大きく異なるフィリピン社会では災害の情報がどのように伝達され共有されるのかに関心を持っています。もっとも、私は主に台風災害を想定していましたが、マニラの人々にとっては交通渋滞の方がずっと深刻な「災害」のようです。

私はマレーシアとは6年間の長期滞在を含めて約30年間、インドネシアとは1年間の長期滞在を含めて約10年間関わってきたので、マレー・イスラム世界（イスラム教圏東南アジア）には馴染みがありますが、キリスト教圏のフィリピンはこれまで旅行や調査で短期滞在したことしかなく、日々驚きと発見の連続です。

一番驚いたのはフィリピンの人々がよく行列することです。買い物したり乗り物を待ったりするとき、誰かに指示されなくてもみんな当然のように列を作り、どんなに長くうねうねしても列が維持されたまま進みます。地方でもそうなのかはまだよくわかりませんが、マニラでは至るところで行列を見かけます。ミサでパンとワインをもらうときと同じくどんどん進むため、長蛇の列でも待っていればそのうちに順番がまわってきます。「行列ができる店」と聞いても、フィリピン人は「普通の店」という意味で理解するのかもしれ

ません。

ただしフィリピンの人々が常に礼儀正しく譲り合うというわけでもなく、特にひどいのが電車の乗り降りです。マニラの電車は区間と時間帯によっては超満員で何本も見送らないと乗れないほどですが、道路は渋滞がひどいので私はよく電車を使います。切符を買うときは列に並ぶし、ホームでも並んで待っていますが、電車が入ってきてドアが開いた瞬間に一齐に車内に突入します。電車に乗っている側から見ると、駅に着いてドアが開くと、ホームにはドアをふさぐように人が3列になって立っていて、どうやって降りればいいのかと一瞬でもひるむならば、3列の人々が車内になだれ込んできて、先を争って座席を確保しようとします。そしてここが不思議なところですが、フィリピンの人々はよく座席を譲ります。特に女性に対しては、40代の後半ぐらいで見た目は元気そうでも誰かがさっと席を譲ります。乗るときにあれほど激しく席を奪い合ったのは後で他人に譲るためかと思うほどです。

電車の乗り降りはともかく、フィリピン社会は「待っていれば順番がまわってくる」ということへの信頼がとても高いという印象を強く受けています。それはマニラだけのことなのか、そして日常的に行列を作ることが災害などの非常時にどのような意味を持ちうるのかななどを考えながら、フィリピンの台風シーズンを迎えたいと思います。

（山本 博之）



共同研究ワークショップ開催報告

せめぎあう眼差し——関連する地域を読み解く

4月25日、地域研にて恒例の共同研究ワークショップが行われました。インターネットが爆発的に普及した現在では、遠く離れた地域のことも簡単に知ることができます。しかし、ネット上には様々な見方が溢れています。中には誤解や偏見に満ちた情報もあるでしょう。私たちは、何でも知り、自由に発言できるようでいて、実際にはそうでないかもしれません。

とすれば、地域を理解し、社会を理解するとは一体何でしょうか。言うまでもないことですが、私たちは神の視点に立って他者を見ているわけではありません。個人と個人の間にあれば、両者は具体的な関係性の中でお互いを理解しています（或いは、理解したと認識します）。集団の間においては、それが更に多層的となるでしょう。職場や学校、自治体などのレベルから、国家や宗教、ヨーロッパやアジアといった地域のレベルにおいても、人々は関係性の網の目の中で他者を理解していると言えます。

今回のワークショップでは、以上の点を踏まえ、相互の関係性をテーマとするプログラムを組みました。つまり、人と人、地域と地域の眼差しがせめぎあう具体的な現場を題材にし、社会や経済、国際政治、文化の側面から、関連する地域を読み解くことを目的としました。

最初の樋口敏広報告（京大白眉センター）では、1950年代の核実験による放射能汚染が素材として取り上げられました。全世界の汚染状況を明らかにしようとしたアメリカの科学者は、世界各地と向き合うことにより、それぞれの地域が抱える個別の問題にぶつかります。次の福田報告では、19世紀のチェコ人作曲家ドヴォジャークに焦点が当てられました。ドヴォジャークは「新世界」のアメリカに招聘され、アメリカ音楽の創造を期待されましたが、そこで直面したのは音楽世界における「文明」と「野蛮」をめぐる激しい論争でした。

大石高典報告（地球研）では、カメルーンにおける狩猟採集民と農耕民の関係性がテーマとされました。資源開発や紛争、自然保護といった様々な背景から「外部者」が介入することにより、コミュニティ同士の伝統的な関係にも微妙なずれが生じてきています。最後の岡田勇報告（名古屋大）では、ボリビアの鉱山に焦点が当てられ、複雑な労使関係の実態が明らかにされました。グローバリゼーションや国際価格の変動によって資源ナショナリズムが触発されるという単純な構図ではなく、更に「ねじれた」関係性が生まれています。

以上の4報告に対し、コメンテータの村上薫氏（アジア経済研究所）より、アクター間の関係は決して平等なものではなく、いずれの事例についても力の差が存在し、ヘゲモニーの変容という観点から各ケースを見る必要性が指摘されました。栗本英世氏（大阪大学）からは、力関係の問題を踏まえつつも、どっちつかずのアクターや媒介者にも注意する必要性についてコメントがありました。その他、フロアからも「関連する地域」について活発な議論が行われました。当日の詳しい模様については、2015年度末に発行される地域研のディスカッション・ペーパーにて紹介される予定です。

最後になりましたが、ワークショップを実現するにあたってご協力をいただいた関係者の皆様に、この場を借りて感謝を申し上げます。

（福田 宏・愛知教育大学）



共同研究の現場から

2015 年度より共同利用・共同研究の新しい体制が始まりました。

複合ユニット紹介

宗教実践の時空間と地域

本複合ユニットは、ある地域の風景を築き、同時に一地域を越える宗教実践のパターンを時空間軸に着目して分析し、可視的に提示することを目的としています。昨年度まで傘下にあった4つの個別ユニットは予定どおりすべて終了し、3つのユニットが成果を公開しました。最終年度を迎えた本複合ユニットは、新規採択の個別ユニット「仏教をめぐる日本と東南アジア地域—断絶と連鎖の総合的研究」を組み込み、全体の研究成果をまとめるべく活動しています。複合ユニットは7月5日に「カンボジア仏教の時空間分析への取り組み」「ベンガル湾を舞台とする仏教の分岐と交錯の2世紀：描出と分析に向けた方法論の検討」「地域研究のための時間・空間・意味の情報基盤」の3つの発表を通じて、時空間マッピングとデータベース化の手法を検討し議論を深めました。個別ユニットは6月11～12日、7月18～19日、11月22～23日の計3回の研究会で課題に直結する15本の発表を精力的に実施し、その成果をまとめる商業出版計画も進めています。いずれのユニットでも宗教実践が現出する時空間、ヒトやモノの移動に着目し、ある地域の歴史文化的な構成や地域間の交流、断絶の関係を浮かび上げることによって各地域での事象を解明するとともに、特定の地域や時代を横断する宗教実践の諸特徴を統合的に分析する手法を探っています。

(代表 林 行夫・小林 知)

複合研究ユニット紹介

CIAS 所蔵資料の活用

複合ユニット「CIAS 所蔵資料の活用」には、2015 年度から新たに、個別研究ユニット「1950・60 年代の東南アジア・ムスリムの社会史」(代表：坪井祐司「東洋文庫・研究員」)が加わりました。この個別研究ユニットで活用するのは、CIAS が所蔵・公開しているジャウィ (マレー語のアラビア文字表記) の雑誌『カラム』の記事データベースです。『カラム』は1950～69年にシンガポール・マレーシアにて出版された月刊の総合誌で、CIAS は、欠号率がきわめて低い状態で資料を収集し、その記事を、ローマ字翻字した上で、雑誌記事データベースとして公開しています。『カラム』記事データベースを活用し、本研究では、情報学の技術を用いたテキスト分析と地域研究者によるテキスト分析の二つを有機的に連携させる研究を行っています。それにより、大量かつ瞬時の情報処理と、人間によるひらめきとを融合させた、新しい視点を見出すことを目的としています。これは、本個別研究ユニットの課題であるだけでなく、複合共同研究ユニットの大きな挑戦の一端でもあります。試行錯誤の成果につきましてはぜひご期待ください。

(代表 柳澤 雅之)



QALAM 雑誌記事データベース
<http://majalahqalam.kyoto.jp/>

2015 年度より共同利用・共同研究の新しい体制が始まりました。

複合ユニット紹介

非文字資料の共有化と研究利用

本複合領域プロジェクト「非文字資料の共有化と研究利用」は、最終年度における成果創出を実現するために、研究対象を華北交通写真群（京都大学人文科学研究所蔵）に特化することにし、それにもなつて一部メンバーが交替した。これまで紹介しているとおり、この写真群は3万6534点のコンタクトプリントあるいは分類用に利用するために引き伸ばされた写真からなる。いずれも台紙に糊付けされて、①通し番号、②撮影者、③撮影年月日、④撮影場所、⑤キャプション等の情報が付されている。なかには写真が掲載された雑誌名、使用されたイベント名が記載されているもののあり、それらの利用時期は許認可を示すスタンプなどで確認できる。華北交通写真群とはいえ、1938年設置の国策会社華北交通株式会社のものだけでなく、その前身のひとつであった南満洲鉄道株式会社天津事務所北支事務局（天津事務所）の写真群も含まれている。この写真群のデジタル化は、さまざまな外部資金を利用して2010年度から進められ2014年度によりやくすべてのデジタル化を完成させた。5年間かけて、この写真群の資料保存という目的を達成することができたのも、本プロジェクトに対する関係各位の理解と協力の賜物である。現在、共同研究のメンバーを中心に、この写真群の内容分析、分類、データ化を進めており、最終年度の成果として、2016年に国書刊行会から論文集を刊行すると同時に、同年末には日本カメラ博物館でこの写真群を使った特別展を開催する予定でいる。



華北交通論集第1回協議会の様子
(2015年3月17日、京都大学人文科学研究所にて)

(代表 貴志 俊彦)

複合ユニット紹介

「地域の知」の情報学 ―時間・空間・語彙に注目した地域情報学の展開―

これまでの研究では、位置と時間に関する計量的属性に注目した地域研究データの共有化を進めてきました。これらの成果は資源共有化システムや時空間情報処理ツール（HuMap および HuTime）として実現しています。一方、大量の地域研究データが Web 上で流通するビッグデータ社会が到来し、データを人手で処理することは困難となりつつあり、何らかの支援ツールが必要となります。そこで「『地域の知』の情報学—時間・空間・語彙に注目した地域情報学の展開—」では、従来の計量的属性に加えて、語彙に注目した地域情報学の展開を目指しています。複合研究ユニットでは、研究のプラットフォームとなる情報システムを構築しています。これは、いろいろな構造の地域研究データを一定の形式に変換して「貯める」データベースシステムです。個別研究ユニット「地域研究データにおけるトピックの検出と時空間変化に関する研究」では、テキストマイニング手法を用いて、テキスト中の定性的表現を定量的表現に変換する手法の確立を目指します。これにより、データベースに蓄積されたバラバラなデータを意味的に「繋げる」ことをめざします。個別ユニット「地域研究データにおけるトピックの検出と時空間変化に関する研究」では、テキスト中の「頃」や「辺り」などの曖昧な時空間記述の定量化と可視化をめざします。これにより、データベースに蓄積されたデータの高度な「利用」の可能性を探ります。以上の研究を通じて、地域研究データを「貯めて」「繋げて」「利用する」情報学的フレームワークと情報ツールの構築を目指します。

(代表 原 正一郎)



地域研究資源共有化システム

<http://app.cias.kyoto-u.ac.jp/GlobalFinder-Ig/cgi/Start.exe>

コトとしての建築

山田 協太

地域研究統合情報センター特任助教。
専門は、南アジアの地域居住環境形成史、
地域居住環境デザイン。

南インドのタミルナドゥに位置する地方都市ナーガパッティナムを2003年にはじめて訪れた。建築学と生活科学に関わる地域生活空間計画の視点から、近代都市の生活空間の特質を捉えるというプログラムの一環で町を調査した。17世紀中ごろにオランダの植民都市となった経緯のある町だが、オランダ人のいたことなど嘘のようにオランダの痕跡はわずかだった。印象的だったのは、住宅の空間構成を調べるために訪問した家々で聞かせてもらった、「昔はシンガポールに住んでいた」、「祖父はビルマから来た」、という話だった。また、ナーガパッティナムの隣には、南インド随一のイスラーム聖者廟（ダルガー）がある町ナゴールがある。聖者アブドゥルカーディル・ズイーラーニーの生没日を祝うカンドゥーリと呼ばれる祭りでは南インドを中心に、ナゴール・ダルガーに10万人単位で人が集まるが、その高さ30m程の5本のミナレット（塔）に掲げられる旗の1つは、毎年シンガポールから贈られる。

これらの話を聞き、海を跨いだ人々の往来と、往来をつうじた町と町との歴史的結びつきを意識するようになり、2009年から地域研究に関わると、人々の移動とインド洋を跨いで共有される住まい方について、町に建設された宗教施設に着目しながら調査をはじめた。移住者の定着とともに信仰の中心として建設される宗教施設は、住まい手の来歴と日常を知る貴重な資料を提供してくれる。ナゴール・ダルガーに着目し、関係者の話を聞いてナーガパッティナムからシンガポールへ、シンガポールからペナン、ヤンゴン、コロomboへと移動すると、シンガポール、そしてペナンにも、イギリス植民地時代の19世紀初頭に、ナゴールからの移住者によって建設されたとされる同名のダルガーがあることが分かった。他方で、ミャンマー、スリランカにもナゴールに因んだ施設があるはずだと聞いたものの、ナゴール・ダルガーとして知られる聖者廟は見つからなかった。

ところが今年、ふとしたことからカンドゥーリについて尋ねると、ミャンマーではヤンゴンで4つ、モラミヤインで10以上、スリランカではコロombo、ズイーラーン、キャンディなどの町で数十、ナゴールの聖者の祭がおこなわれていることが分かった。17世紀以来の祭もあれば、近年始まったものもある。ミャンマー、スリランカでナゴールとつながりを持つ施設をこれまで見つけれなかったのは、建物としてのダルガーを探していたことによる。しかし、ミャンマー、スリランカでは、柱だけが建っていて、祭りの際に旗を掲げる簡素な施設や、他の聖者のダルガーの中で祭りがおこなわれる場合が一般的だった。こうした祭りが出発点にあり、その活動が大規模になるとダルガーという形があらわれる。建築はモノとして考えがちだが、住まい手の日常生活から生まれる、コトとして捉える視点の大切さを再確認した。



ナゴール・ダルガー 遠方にインド洋を眺める

・ 出版物の紹介 ・

地域研が刊行した出版物と、地域研スタッフが執筆・編集した出版物を紹介します。

 CIAS 叢書サブシリーズ 情報とフィールド科学 1 映画から世界を読む ● 山本博之 ● A5 判 62 頁 ● 2015 年 3 月	 CIAS Discussion Paper Series CIAS Discussion Paper Series No. 51 書誌情報データベースの地域情報学の新展開を探る ● 帯谷知可 編 ● A4 判 56 頁 ● 2015 年 3 月	 JCAS Collaboration Series JCAS Collaboration Series No. 10 世界はレイシズムとどう向き合ってきたか —地域研究とジャーナリズムの現場から— ● 宮原暁・山本博之・石丸次郎・立岩礼子・西芳実 編 ● A4 判 48 頁 ● 2015 年 3 月
 CIAS Discussion Paper Series CIAS Discussion Paper Series No. 45 フィリピンの台風災害に関する緊急研究集会報告書 台風ヨランダはフィリピン社会をどう変えるか —地域に根ざした支援と復興の可能性を探る— ● 山本博之・青山和佳 編著 ● A4 判 72 頁 ● 2014 年 4 月	 CIAS Discussion Paper Series CIAS Discussion Paper Series No. 52 日本のマンガミュージアム2 —マンガミュージアムを介した地域力の再生／地域力によるマンガ文化の創出— ● 谷川竜一・山中千恵・伊藤遊・村田麻里子 編 ● A4 判 124 頁 ● 2015 年 3 月	 JCAS Collaboration Series JCAS Collaboration Series No. 11 地域から研究する産業・企業 —フィールドワークとディシプリン— ● 川上桃子・塩谷昌史・柳澤雅之 編 ● A4 判 52 頁 ● 2015 年 3 月
 CIAS Discussion Paper Series CIAS Discussion Paper Series No. 46 積徳行と社会文化動態に関する地域間比較研究 —東アジア・大陸東南アジア地域を対象として— ● 長谷川清・林行夫 編 ● A4 判 132 頁 ● 2015 年 3 月	 CIAS Discussion Paper Series CIAS Discussion Paper Series No. 53 『カラム』の時代 VI —近代マレー・ムスリムの日常生活 2— ● 坪井祐司・山本博之 編著 ● A4 判 38 頁 ● 2015 年 3 月	 JCAS Collaboration Series JCAS Collaboration Series No. 12 東南アジアの移民・難民問題を考える —地域研究の視点から— ● 西芳実・篠崎香織 編 ● A4 判 56 頁 ● 2015 年 10 月
 CIAS Discussion Paper Series CIAS Discussion Paper Series No. 47 移動と宗教実践 —地域社会の動態に関する比較研究— ● 小島敬裕 編 ● A4 判 128 頁 ● 2015 年 3 月	 CIAS Discussion Paper Series CIAS Discussion Paper Series No. 54 2004 年スマトラ沖地震・津波復興史 I ● 山本博之・西芳実・篠崎香織 編 ● A4 判 362 頁 ● 2015 年 3 月	 その他（スタッフ刊行物） 増補改訂 戦争・ラジオ・記憶 ● 貴志俊彦・川島真・孫安石 編著 ● 勉誠出版 A5 判上製・632 頁 ● 2015 年 7 月
 CIAS Discussion Paper Series CIAS Discussion Paper Series No. 48 GENOCIDIO EN LOS ANDES, EL SILENCIO DE LOS VIVOS Y EL GRITO DE LOS MUERTOS: TESTIMONIOS DE MUERTES EN PUTIS Y OTRAS COMUNIDADES ALTOANDINAS Y AMAZONICAS ● Artemio Sánchez Portocarrero ● A4 判 86 頁 ● 2015 年 3 月	 CIAS Discussion Paper Series CIAS Discussion Paper Series No. 55 2004 年スマトラ沖地震・津波復興史 II ● 山本博之・西芳実・篠崎香織 編 ● A4 判 214 頁 ● 2015 年 5 月	 その他（スタッフ刊行物） The International Forestry Review Vol.17 (S1) ● B.POKORNY, W.DE JONG, A. J. POTTINGER(Eds.). ● The Commonwealth Forestry Association A4 判 146p ● 2015
 CIAS Discussion Paper Series CIAS Discussion Paper Series No. 49 国民音楽の比較研究に向けて —音楽から地域を読み解く試み— ● 福田宏・池田あいの 編著 ● A4 判 74 頁 ● 2015 年 3 月	 雑誌「地域研究」 地域研究 第 15 巻第 1 号 総特集 グローバル・アジアにみる市民社会と国家の間 —危機とその克服— ● 地域研究コンソーシアム「地域研究」編集委員会 編 ● A5 判 212 頁 ● 2015 年 4 月	 その他（スタッフ刊行物） Modernização urbana e cultura contemporânea: diálogos Brasil-Japão ● Andrea Yuri Flores Urushima, Raquel Abi-Samara, Murilo Jardelino da Costa (Eds.). ● São Paulo: Terracota Editora 16x23cm 240p. ● 2015
 CIAS Discussion Paper Series CIAS Discussion Paper Series No. 50 世界のジャスティス —地域の揺らぎが未来を照らす— ● 谷川竜一 編 ● A4 判 62 頁 ● 2015 年 3 月	 JCAS Collaboration Series JCAS Collaboration Series No. 9 子どもたちは多様な地域に何を学ぶのか —感じ方の育みと総合的理解の視点— ● 飯塚宜子・王柳蘭 編 ● A4 判 120 頁 ● 2015 年 3 月	

地域研究のフロンティア 5

『21世紀ラテンアメリカの挑戦——ネオリベラリズムによる亀裂を超えて』

村上勇介 編（京都大学学術出版会、菊判上製 188 頁、2015 年 3 月）

1980 年前後以降に民主化と市場経済原理の徹底化（ネオリベラリズム改革路線の導入）を並行して実施する状況に世界で最も早く直面したラテンアメリカ諸国を対象に、ネオリベラリズム改革の政治社会への影響、ならびにネオリベラリズムに対する批判や見直しが支配的な基調となった今世紀のポストネオリベラリズム段階の政治変動について比較分析した。注目したのは政党政治への影響で、ネオリベラリズム期からポストネオリベラリズム期へと政治状況が変化する際、ネオリベラリズムに対する批判の受け皿となる中道左派勢力が存在したか否かが、その後の政治社会の安定度を左右したことが判明した。中道左派性結が存在する場合には政党政治が安定化し、そうでない場合は不安定化した。そして、その中道左派勢力は、1980 年前後にラテンアメリカに進んだ軍政などの非民主主義的な支配から民政移管した際に重要な役割を担った点で共通していたことも指摘した。以上の分析を受け、安定した事例と不安定化した事例からそれぞれ三ヶ国を選び（エクアドル、コロンビア、ペルーならびにブラジル、ウルグアイ、チリ）、ネオリベラリズム期からポストネオリベラリズム期にかけての政治変動をより詳しく検討した。

（村上 勇介）



CIAS 叢書サブシリーズ《災害対応の地域研究》第3巻

『国際協力と防災——つくる・よりそう・きたえる』

牧紀男・山本博之編著（京都大学学術出版会、A5 判 278 頁、2015 年 3 月）

日本の「防災」では構造物を「つくり」、被害を無くすことが中心である。しかし、構造物をつくり被害を無くすという方式での「防災」は少数派で、アジアの各国では、建物が壊れたら直す、という回復力に頼った「ほうさい」が主流である。ただ、被害が出ないのに越したことはなく、日本式「防災」でアジアを「きたえる」試みは長く続けられてきた。企業の進出に伴い、アジアの災害が日本の工場を止める、という事態も発生するようになり、アジアでも日本式の「防災」が求められている。アジアには自然災害だけでなく、戦災からの社会の再建に取り組む地域も存在する。自然災害からの回復には長けた地域も、戦災からの回復過程では自然災害とは異なる様々な困難に直面する。本書は「災害対応の地域研究」プロジェクトの成果であり、地域研究・防災の専門家が、実際の災害事例についてそれぞれの立場から検討を行う。地域研究の立場からアジアの防災をどう考えるのか（タイ洪水、フィリピン台風）、地域に「よりそ」ってきた地域研究者が戦災からの社会の再建をどう見たのか（カンボジア内戦、東ティモール独立紛争）、30 年近くにわたってインドネシアの防災力を「きたえて」きた防災専門家の経験、アジアにおける企業防災の課題、についての報告がなされ、多様な専門家が様々な災害事例の検討を行うことで、ステレオタイプではない新たなアジアでの防災国際協力の姿が浮かび上がってくる。

（牧 紀男）





Shaping the Middle Class City: A Comparative Study on Ordinary Residential Architecture, 1950s-1970s

Gaia CAMELLINO (任用期間：2015年8月1日～10月31日)

My work address the history of 20th century housing policies, forms, cultures and practices, devoting a particular attention to the circulation of residential models and ideals between the 1930s and the 1960s. It is possible to identify two main lines: the first focuses on the encounter between modernist European architectural principles and American federal policies in the shaping of the first New Deal housing programs; the second, investigates the residential architecture built for the middle class between the 1950s and the 1970s, analyzing the role that collective buildings and neighborhoods built for this social group had in the processes of growth and transformation of the post-war city. Rarely addressed by architectural historians, this “average production” met the requirements of a booming market, capable of codifying the expectations and needs of the middle class in terms of domestic comfort and modernity and to produce shared and recognizable residential solutions in very different social, political and economic contexts.

To broaden the geographic boundaries of the comparative study, linking the cases in a wider interpretative frame, I plan to investigate the specificities and general features (in terms of typologies, practices, market strategies, actors involved, professional culture, techniques, lifestyles...) that characterize the process in Japan. Adopting the same investigation tools and methodology, the research explore the circulation, hybridization, local reception/rejection of European housing and settlement models in the construction of a number of large-scale collective housing projects built in Japan after WWII. Through the analysis of these cases study (not only addressed through the study of the design and construction processes, but also looking at the forms of use and transformation) the study aims to observe the encounter between local domestic cultures and the foreign models, devoting a particular attention to the multiple ways of their dissemination (i.e. through the specialized press).



JCAS NEWS

地域研究コンソーシアム (JCAS) 2015 年度の活動

地域研究コンソーシアム (JCAS) の活動は設立から 11 年目となりました。2015 年 8 月末現在、99 の組織が加盟しています。

JCAS の年次集会は多様な地域研究機関・組織や研究者の出会いの場です。今年は 10 月 31 日(土)、11 月 1 日(日)の 2 日間、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 (東京都府中市) にて開催される予定です。総会ならびに一般公開シンポジウムが行われます。総会では、第 5 回地域研究コンソーシアム賞の審査結果の公表ならびに授賞式も予定されています。

JCAS では、次世代支援、共同企画研究、共同企画講義、オンデマンド・セミナー、学会連携、特定課題研究などの公募プログラムを展開しています。ご応募をお待ちしております。また、学術雑誌『地域研究』への特集企画の応募、個別論文の投稿も歓迎いたします。

地域研究関連のイベント・公募・出版物情報などをいち早くお届けするメールマガジン JCAS News を配信しています。配信申込みは、jcasnews-join@jcas.jp へ本文なしのメールをお送りください。

その他、JCAS の活動の詳細については、ぜひホームページ (<http://www.jcas.jp/>) をご覧ください。

(西 芳実)

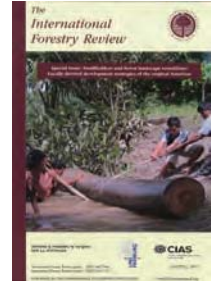
新刊紹介

The International Forestry Review Vol. 17 (S1), 2015 Special Issue: Smallholders and forest landscape transitions: Locally devised development strategies of the tropical Americas

B.POKORNY, W.DE JONG, A. J. POTTINGER (Eds.)

ISSN 1465-5498

Smallholders and forest landscape transitions: Locally devised development strategies of the tropical Americas is a special issue of the journal *International Forestry Review*. It contains eleven papers that advance current thinking on the role of smallholders in rural development. The papers collectively show that while there is opportunity to more actively engage smallholders in local development and environmental protection of tropical America, this requires major changes in policy design and implementation. Current policies allow only a small proportion of smallholder families to become economically successful with the right support. Policies and projects better adapted to the needs and capacities of smallholders can boost their role in regional sustainable development. Decision makers represent the interests of urban, developed societies and they have little understanding or concern for smallholders. Urban and developed societies, however, will increasingly face the effects of climate change, poverty migration, financial crises and food insecurity. This gives grounds for a cautious optimism that more integrative approaches to rural development will be pursued that put at the centre nature and smallholders of tropical America as its managers.



Modernização urbana e cultura contemporânea: diálogos Brasil-Japão

Andrea Yuri Flores Urushima, Raquel Abi-Samara, Murilo Jardelino da Costa (Eds.)

ISBN: 978-85-8380-028-6

This book treats the processes of urban modernization and their relation to aesthetical representations and intellectual change in Brazil and Japan. This is a multidisciplinary collection from contributors of varied background, affiliated to institutions in Japan and Brazil, including Kyoto University, University of Tokyo, International Center for Japanese Studies, University of Sao Paulo and University of Campinas.

The thematic and formal innovations produced inside the literary and architectural circles are outcomes of complex transformations taking place in urban centres. The crossroads and parallelism of the architectural and literary traditions, as well as, the dialog between singular processes of urban, cultural and stylistic renewal in these two contexts, compose the research realm of the chapters of this book.

These chapters treat, among other themes, the incorporation of the haiku poetic style within the literary circles of Brazil; the influence of the Brazilian architectural modernism in Japan; the apparition of a Japanese written literature among immigrants in Brazil; the construction of a discourse of aesthetical singularity in response to the reception into distant regions of the Japanese art; the impact of the Japanese immigration to the urban transformation in Sao Paulo and the worldwide exportation of an urban non-western modernity from Japan.



TABLE OF CONTENTS:

PREFACE: CENTENARY AND CULTURE OF PEACE (Jo Takahashi, former Director of the Cultural Division of the Japan Foundation Office in Sao Paulo)
URBAN MODERNIZATION AND CONTEMPORARY CULTURE: DIALOGUES BRAZIL-JAPAN (Andrea Flores Urushima, Raquel Abi-Samara, Murilo Jardelino)

1. THE HAIKAI IN BRAZIL (Paulo Franchetti, professor at UNICAMP in literary studies)
2. KENZO TANGE AND OSCAR NIEMEYER: ARCHITECTURAL STYLES IN TUNE (Terunobu Fujimori, professor emeritus of the University of Tokyo in architectural history)
3. THE MODERN LITERATURE OF THE JAPANESE IMMIGRANTS IN NEWSPAPER'S SERIALS BETWEEN 1920 AND 1930 (Shuhei Hosokawa, professor at Nichibun in Japan-Brazil history)
4. FROM JAPONISM TO MEDIEVALISM: THE FORMATION OF AN ORIENTAL AESTHETIC AND THE CRISIS OF THE MODERN URBAN CULTURE (Shigemi Inaga, professor at Nichibun in literary studies and history)
5. THE FOREIGN PRESENCE IN SAO PAULO: THE 'LIBERDADE' DISTRICT AND THE RURAL FIELDS OF ITAQUERA (Mara Cristina Leme, professor at Sao Paulo University in urban planning history)
6. CONTRADICTIONS OF THE MODERNIZATION OF BELEM, THE AMAZON METROPOLIS (Wili Bolle, professor emeritus at Sao Paulo University in history)
7. THE CENTRE IN THE PATHWAY TO THE METROPOLIS (Regina Prosperi Meyer, professor emerita at Sao Paulo

- University in urban planning theory and history)
8. THE WRITING OF THE CITY: MODERNISING TRANSFORMATIONS AND THE URBAN PROJECTIONS IN THE PRE-MODERN BRAZILIAN LITERATURE (Mauricio Silva, professor at UNINOVE in linguistic and history)
9. PRODUCING URBAN LITERATURE IN THE LATIN AMERICAN CONTEXT (Fernando Bonassi, writer)
10. THE 'MYSELF' INSIDE THE URBAN SPACE: JUNICHIRO TANIZAKI AND THE SPATIAL THEORY OF 'THE SECRET' (Manabu Fujiwara, assistant professor at Kyoto University in architectural history)
11. KYOTO AND KAMAKURA: THE TALE OF TWO CITIES IN THE HISTORY OF JAPAN (Shoichi Inoue, professor at Nichibun in architectural history and Japanese history)
12. THE LITERARY GENRE OF SANSUKU OR STROLL: ANNOTATIONS: TOKYO CITY AND HIYORI GETA OF KAFU NAGAI (Masahiro Shindo, professor at Ottemon Gakuin University in literary studies)
13. MASS URBAN CULTURE IN JAPAN DURING THE FIRST HALF OF THE TWENTIETH CENTURY: THE EVOLUTION OF CITIES AND THE TRANSFORMATION IN THE ARTS (Sadami Suzuki, professor emerita at Nichibun in literary studies)
14. THE HUNDRETH YEARS CELEBRATION SINCE MEIJI AND THE GLOBAL DISSEMINATION OF THE JAPANESE URBAN DESIGN (Andrea Flores Urushima, researcher at Kyoto University in urban planning history and theory)

増補改訂 戦争・ラジオ・記憶

貴志俊彦・川島真・孫安石 編

ISBN: 978-4-585-22119-7

2006年3月に勉誠出版から『戦争・ラジオ・記憶』を刊行してから（以下、旧版と称す）、すでに9年がたつ。この9年間に、日本、そして世界のいくつかの地域は東日本大震災ほか大規模災害にみまわれ、また日本をめぐる国際関係、国内の政治・経済・社会・文化は大きく変化した。この増補改訂版は、この9年間の国内外の変化を反映しつつ、20世紀史という枠組みのなかでラジオが果たした役割を緻密に分析する論考で構成されている。とくに本書第4部の「研究動向」では旧版刊行後に公表された関連研究の動向が要領よくまとめられており、これらを参照すれば、9年前に私たちが播いた学問的種が芽生えつつあることはわかっていただけだと思う。実際、東アジアの放送史研究あるいはメディア史研究に携わる若手の研究者も、国内外ともに確実に育っており、本書にも彼ら／彼女らの新しい成果を盛り込んでいる。



[目次]

増補版序言 戦後七十年一再評価されるラジオ
第1部 戦争とラジオ
第2部 ラジオと「帝国」
第3部 冷戦とラジオ
第4部 研究の潮流

第5部 ラジオ研究著作シリーズ-自著・他著を語る
第6部 ラジオ研究のための文献・資料紹介
文献リストⅠ (2005/文献リストⅡ (2006年以降)
巻末資料

新任紹介

中山大將助教が着任しました

本年4月より助教を務めさせていただいております。3月までは日本学術振興会特別研究員として3年間、北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター（以下、スラ研）で研究を行っておりました。近代において5度も境界が変動したサハリン島の近現代史について、これまで日本帝国植民地樺太の移民社会形成過程を主に農業拓殖問題から、またその解体過程を主にサハリン残留者問題から研究して参りました。スラ研はユーラシア地域研究を専門とする研究機関であり、日本やアジアから世界を見ていた自分にとっては大いに勉強になったと同時に、各地域の地域研究をつないでいくことの重要性も感じました。地域研ではそうした課題に応えることができるような仕事に取り組めれば思っております。情報学の現状やどんなツールが研究のために利用可能かなどについてはまだまだ勉強しなければならないことばかりですが、地域研でしかできないような仕事にぜひ取り組み、地域研究および人文社会科学の効率化や専門分野間の横断性の向上、新しい可能性の模索に少しでも貢献できればと思っております。また、研究者が収集した民間資料を、論文などの研究成果としてだけではなく、提供者にとって直接的利益になるような還元方法、協力方法も、自身の研究活動を基に模索して行きたいと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。



The Last Photograph

百間排水口

アジアにおける日本の水力発電開発史を調べる中で、水俣を訪れた。水俣は、熊本・鹿児島県境に近い曾木水力発電所の余剰電力を用いて、20世紀初頭にカーバイド工場が設立された場所だ。同工場が、その後日本窒素肥料株式会社（後のチッソ）の拠点工場の一つとして発展していくわけだが、行ってみて驚いたのは汚染水が流されていた排水口がこの写真で見えるように、本当に小さなものだったことだ。漠然と水俣病を知ってはいても、それが地域においていかなる空間的な規模や広がりをもっ



て発生したのかは、本を読んでもわからない。現在水俣湾のヘドロは集められ、広大な埋め立て地となっているが、実はこんな小さな排水口から出た廃液がもとになっていたとは。

（谷川 竜一）

表紙写真について

Photo by N. Utarbekov

ウズベキスタン南部のボイスン。2001年にユネスコ無形文化遺産として「ボイスン地域の文化的空間」が登録されてから、この山間の小さな町で国際的なフォークロア・フェスティバル「ボイスンの春」が開催されるようになった。ユニークなフォークロアや工芸、自然環境、人々の生活ぶりまでもが観光資源になりつつある。2004年撮影。（文／帯谷 知可）

京都大学地域研究統合情報センター
ニューズレター No.17

●発行日 2015年9月30日

●発行者

京都大学地域研究統合情報センター
〒606-8501
京都市左京区吉田下阿達町46
Tel: 075-753-7302
Fax: 075-753-9602
<http://www.cias.kyoto-u.ac.jp/>

●編集責任 亀田克由

●編集協力・表紙デザイン 川島淳子